

## 〈研究ノート〉

## “-er”の系譜：サブカルチュラル・アイデンティティの現在\*

難 波 功 士\*\*

英語圏においては、テレビ番組『スタートレック』のファン集団を“Startreker”もしくは“Startrekkie”と呼ぶように、また“Generation X”の若者たちを“Xer”と呼ぶように、接尾辞“-er”（…する人、…出身者、…の関係者、…の性質を持つ人）や、愛称をつくる“-ie”などを用いて、ある a way of life を共有する人々をカテゴライズし、それを名指すための新語が生み出される例は少なくない。「ハッカー」「ストーカー」「サポーター」「(セクシャル)ハラッサー」や「ヒッピー」「ヤッピー」など、日本へと輸入され、広く使用されたものも多く、さらにそこから「ジャッピー（ヤッピーの日本版）」といった語が派生した例もある（岩田ほか，1987；イミダス編集部，2003）。また、こうした造語法が日本語にも転用され、多くの和製英語や「英風和語」が案出され、時に流行語となり、そのいくつかは広く定着もしている。前稿では（難波，2005b）、「…族」「…系」としてある若者たちが命名されてきた経緯を検討したが、本稿ではさらに、“-er”“-ie”を用いてある若者たちを括り、言い当てようとしてきた系譜をたどり、その含意を探っておきたい。

## 【1】「…族」のオルターナティブとしての“-er”：1970～80年代前半

英語の接尾辞を転用し、新たな日本語がつくり出された例は、1930年代頃までに遡りうる。“-ist”を用いた新語として、「ダラリスト（だらしとして人）」「アルキニスト（乗物を利用し

ない人）」「ヨタリスト（いい加減な与太話をする人）」「ギンブラリスト（銀座をぶらつく人）」などが、『モダン語辞典』等に採録されている（米川，1989）。また戦前の学生用語には「ニヤリスト（ニヤニヤ笑っている人）」があり、戦後の女学生用語には「 $\sqrt{8}$ （ニヤリスト。 $\sqrt{8}$ は2.828…（ニヤニヤ）となるから）」なども存在した（米川，1998）。“-er”を用いた例としては、60年代の学生運動用語に「マイター（ビラをまく人）」があるが、「マイター」のように英語の人をあらわす接尾辞erをつける造語法は当時としては珍しい」とされている（米川，1998：257）。

以上のような例は、英語の素養がある知識人や「エリートとしての学生」たちの、一種の隠語・集団語であり、社会的な広がりを持つものではなかった。英語（ないしその造語法）を流用し、ある若者たちを言い当てる実践が、ひろく世間の耳目を集めた事例は、まず1970～80年代の「ヤンキー」であろう。もちろんこれは、“Yankee”が出自であるが、日本においては集団暴走行為などを行う不良集団（ないしその予備軍）の意に転用されている。これまでヤンキーに関しては、関東の「ツッパリ」に対応する関西独自の存在——語尾にアクセントのおかれる「ヤンキー」——であり、当事者の「ヤンチャしてんのを、“ヤンキー”やな」といった説明や（佐藤，1985：129）、関西弁のヤーサン（ヤクザ）からきたという説、同様に語尾「～ヤン（ケ）」が元であるという説などがあるものの、その語源は必ずしも明らかではないとされてきた<sup>1)</sup>。

\*キーワード：新語、ファンダム、ユース・サブカルチャーズ

\*\*関西学院大学社会学部助教授

1) 1984年版『現代用語の基礎知識』（自由国民社）の「若者言葉」の章には、「ヤンキー族」として採録されており、「ヤーさん」起源説が述べられている。なおこの章には、「暴走族ことば」「ビックリハウス語」などのコー

だが、前稿でもふれたように(難波, 2005a)、やはりこれは関西(弁)固有なものではなく、「Yankee」からの転訛であろう。今井俊博は、60年代後半、後にヤンキーと呼ばれるようになったスタイルの原型を次のように記している。

「六八年秋——もうひとつのアンチが非行青少年のグループからも起こっている。風俗としてのアメリカン・アイビー——ヨコスカ・マンボ族がこれである。それは、アイビーの全く全く正反対の裏返しのルールを採用することによって反社会的であった。／男はリーゼントでひさしをつくり、わざとポマードできめる。女は、真赤な口紅が典型的で、マユは細くはねあげ、茶のシャドウはことさらに濃く。黒の下着、花柄のピキニ、ガーターでストッキングを吊るしてみたり。要は、ミニ・スカート、パンスト、ユニ・セックスなどの中で失われた男臭さ、女臭さを追求したのである。トム・ジョーンズ、モンロー、ジーン・ハーローの世界。エロチシズム。／前述のゲバゲバサイケが、激烈な受験戦争を経過して大学に進んだ、進学組の典型——自意識派が辿った反社会、反体制の路線であったとするなら、後者——スカマン・ロンタイ族のそれは、むしろ非進学コース・グループ——進学する、しないにかかわらず、その態度を非行化の方向に選択したグループの反社会路線であった。／この二つのサブ・カルチャーは、いずれも反社会的で、外へ外へと向かっていくタイプの反体制であったことで共通性がある。しかし、一方、前者は自意識の文化、後者は下半身の文化という風に対照的でもあった」(今井, 1975: 12)

こうした「非進学組のサブ・カルチャー」は、米兵の集まる銀座のディスコ「ステップヘブン」閉店後は、その拠点を渋谷の「VAN」や新宿の「ジ・アザー」に移していき<sup>2)</sup>、ソウル・ミュージック(とそのミュージシャンたちのスタイル)の影響下、独自の発展を遂げていく(KORN,

2002)。

「こうした展開と経過の果てに、VANやジ・アザーなどに見られたスタイルを、ヤンキーと呼ぶようになり、それが二年半くらい前から高校生の中に拡がっていったようだ。／このヤンキー・ファッション。元来が米兵の遊び着のスタイルである。／だから日本製では同じようなものが売られておらず、ヘブン時代にはアメ横でアメリカ製のスラックスや靴やが買われていた。しかし、これは輸入品であるために、思うようなものは少なく、あったとしても高価で、ヤンキーをやるにも随分と苦労があったらしい。／それが、七一年くらいになると、EX(エクスポートの略で、原宿のハラダなど、輸出向けの商品を売る店のこと)のように、輸出品を安く売る店ができたり、デパートあたりでも輸入品がふえて、高価だが一流品が手に入りやすくなった。そんなことがキッカケで、高校生中心に、ヤンキー・ファッション、ヤンキー風俗がかなり流行、——しかも、拡がるにつれて、いろんな情報が入ってその雑種化が進んでいったようだ」(今井, 1975: 287)

その雑種化——「ヨコスカマンボの硬派といっしょになり、髪はパーマをかけたり、リーゼントにしたり。フィリピン・カットに似たヘアスタイルで、スラックスはオリジナルのハイウエスト。スカマンとは違ってきれいなラインを見せている。シャツもオーダーで玉虫色からしぶい模様までいろいろ。スーツはもちろんコンボラ」(今井, 1975: 290)——の中から、後に佐藤郁哉が描き出したような「ヤンキー」が、70年代を通じて形作られていったのである。ヤンキーは、外国語をアレンジした隠語を用いる大学生たちとは異なる階層の若者が、自らのスタイルを名指すために、原義をほとんどとどめないまでに流用した「外来語」であった。

一方、70年代には、雑誌『ビックリハウス』

ナーが設けられていた。「～ヤン」起源説は、2005年11月25日放送『所さんの学校で教えてくれない!』(テレビ東京)などでもとりあげられていた。

2) 「ジ・アザー」は1966年オープン。70年代には「ロックやフォークがユースカルチャーの旗印となり、ソウルの看板を掲げたディスコカルチャーは、好きなものだけのアンダーグラウンドなものになってしまう」(湯山, 2005: 223)。

(パルコ出版、1974～85年)の読者(ないしは投稿者)集団である「ビックリハウサー」のように、自らを“-er”で括る若者たちも登場していた。同誌1978年12月号にて編集長高橋章子が、「BH読者を『ビックリハウサー』と呼ぶことに勝手に決める」と宣言し、以後「文字数に困ったときなどは、ハウサー、BHハウサーとも用い」られ、定着していった(萩原、1993:27)<sup>3)</sup>。この編集サイドからの命名は、読者たちの間にもすぐさま浸透し、現在の「オフ会」にあたるような読者たちの集い「レモンスカッシュ」——「BH誌上で合言葉・日時・目印を指定し、その日出会う他人だったビックリハウサーが、レモンスカッシュを飲みつつディスカッションするうちに、友人になってしまうというまことに感動的なもの」(萩原、1993:154)——が、読者主導のもと催され、全国各地でビックリハウサーたちの交歓がもたれていた。

この『ビックリハウス』の終刊号において、橋本治が70年代のビックリハウサーたちを回顧し、「若者という感じよりも、僕らという仲間意識だけ」と述べたように、60年代に“Youthquake”と呼ばれたような若者文化ムーヴメントの失速と、その後の若者たちの間での、嗜好の細分化といった流れの中で、同じ感性を共有する(と自認し、承認しあった)『ビックリハウス』の読者共同体は、上の世代やマスメディアからのレイベリングの匂いの漂う「…族」の語を避け、自身たちを“誌名+er”として表現したのである<sup>4)</sup>。

## 【2】若者コトバとしての“-er”：1980年代前半～90年代前半

この『ビックリハウス』誌上では、ビックリハウサーによる造語の投稿コーナー「全国流行語振

興会」があり、中には『ビックリハウス』出自の新語が、流行語・若者語として広く世に知られ、定着していった事例も少なくない。1985年刊『最新版ギャル語分け知情報館』には、「本文中、**ビ**は、いわゆるビックリハウス語のことです。雑誌『ビックリハウス』の〈全流振(全国流行語振興会)〉のコラムから巢立ったもの。その言葉あそびの才には目を眩るものがあります。これらの中から、いくつか日本語の土壤に根をおろし、人々の言葉の生活を楽しくするものが出てくるかもしれません」(川崎、1985:3)と注記されている。この本には、「イモベーター(いまだにインベーターゲームをしている時代遅れの若者)」「陸サーファー(ファッションだけのサーファー)」「ベビースモーカー(タバコを吸い始めてまもない人。**ビ**)」などが挙げられており、“Young Urban Professionals”の頭字語(acronym)である「ヤッピー(yuppie)」や、それをもじった「GAPPIE(昭和一桁世代を博報堂が命名。ジェントルかつアングリーでペイシエントなピープルの意)」なども採録されている。こうした例からもわかるように、この時期以後、“-er”などの接尾辞を用いた新語は、若者たちの言葉遊びから発生——その後メディアによる増幅——したものとともに、広告代理店などによる「市場のあるクラスターを括り出し、スポットライトをあてるためのマーケティング手法」出自のものも増えてくる。後者の系統のものは、一過的にメディアを賑わせたのみに終わることが多かったが、リクルート系列のアルバイト情報誌『フロムエー』が仕掛けた「フリーター」の語は、その後の若者の就労・雇用環境変化の中で広く用いられ、定着していくことになる<sup>5)</sup>。

前者の例を、『若者ことば辞典』などの語彙・

3) 1985年10月18日号『朝日ジャーナル』は、『ビックリハウス』の休刊に寄せて、「全流振(全国流行語振興会)によって「エビゾる」などの流行語が生み出され、また、電波・活字を問わずマスコミに全流振認定の流行語が使われると、同誌読者(ビックリハウサー)によって報告されるというフィードバックが盛んであった。逆に言えば、このとき、メディアはまだ、マイナーとメジャーの分水嶺を持っていたのだと言える」と述べている(朝日新聞社、1993:1149)。

4) 大人たちないしマスメディアからの「…族」というレイベリングを揶揄するような「トリノコ族(‘80.12全流振認定語)／時代にとり残されたことの総称。トリノコファッション、トリノコミュージックなどと応用する。／例)「タケノコ族ってなんだ?」「そんなことも知らないのか。お前みたいなのをトリノコ族というんだ!」(湯沢博・広島県)」といった新造語も、ビックリハウサーたちは残している(萩原、1993:21)。竹の子族と同時期、フィフティーズ・ファッションのリヴァイヴアルであった「(ロックン)ローラー」たちも、自称はローラーであったが、マスコミでの取り上げられ方は「ローラー族」であることが多かった(大山、2003)。

5) 1987年には、アルファトゥワン・フロムエー編集部編『フリーター：有名人の無名時代アルバイト体験マル秘

語義集 (glossary) の類から、この時期に創出され、使用されていたものを拾い出していくと、「赤点取りマー・赤点取りラー」「アニメマー (アニメ好き)」「(ダイ) エッター」「エンゲラー (エンゲル係数の高い人)」「オイラー (脂性の人)」「(オ) タッキー (オタクの異称)」「オリバー (雑誌『Olive』ファッションの人)」「キモチイー (気持ち悪い人)」「ゲーマー (ゲーム好き)」「サークラー (サークルによく行く人)」「ザッパー (おおざっぱな人)」「ジェアラ (JRで通勤・通学している人)」「シキラー (仕切る人)」「ジモチイー (地元の人)」「スマッパー (SMAPファン)」「スッチー (スチュワードス)」「ゾッキー (暴走族の異称)」「高ビー (高飛車な人)」「ダブルヘッダー (二股をかける人・こと)」「ダンボラー (ダンボールを集める人。ホームレス)」「チャリダー・チャリラー・チャリンカー (自転車の意味する「チャリ (ンコ)」より派生)」「ティッシュャー (ティッシュを配る人)」「ナルラー (ナルシストの意)」「ニキバー (にきびが

できている人)」「バイター (アルバイト (ばかり) している人)」「ハモラー (カラオケでハーモニーをつける人)」「ブタッキー (部活オタク)」「ブッキー (不器用な人)」「プロラー (ゲーム「ぷよぷよ」の上手な人)」「ベンバー (便秘の人)」「ボヤッキー (ぼやきの多い人)」「眉ラー (眉毛を書くのに命をかけている人)」「メッシュャー (メッシュを入れている人)」「モノクローラー (好んで白黒写真を撮る人)」「ヤニラー・ヤニーズ (タバコを吸う人)」「リッチー (金持ち)」などがある。

以上のような語は、若者たちの仲間内だけで使用されたものであろうが、若者たちの間から発して、広く人口に膾炙するようになった例としては、「チーマー」が挙げられる。90年頃には、すでに「チーム (族)」といった言葉が、雑誌等で取りざたされていたが<sup>6)</sup>、「チーマー」の語が広く知られるようになったのは91年のことであった (難波, 2005c)<sup>7)</sup>。その後、チーマーは死語と化していったが<sup>8)</sup>、こうした若者たちの間での

集 (リクルートフロムエー刊) が出版され、『フロムエー』創刊5周年を記念した映画『フリーター』(製作リクルートフロムエー/バンダイ/東和プロダクション/C.C.J.) が公開された。以後マンガ『フリーター』(三村渉・早坂よしゆき、秋田書店) が登場するなど、「フリーター」の定着により、それまでであった「フリーアルバイター」や「ブー (タロー)」——ホームレスもしくは港湾労働者への異称からの転用 (2005年9月1日発行『(にちぶんMOOK) 荷風! Vol. 5: “横浜”のブルースを聞け!』) ——は駆逐されていった。

- 6) 1991年8月17日号『週刊現代』「東京・渋谷 深夜の“ガキ帝国” 詳解勢力MAP: 「チーム族」を知っているかい」は、この年の7月11日に渋谷センター街にてチームに襲われた大学生が死亡した事件を伝え、そのファッションを、男性の場合は「〈帽子〉ベースボールキャップをよくかぶっている〈髪型〉長めが多いわりときれいな髪質〈アクセサリー〉インディアンジュエリー原宿「goro's」で買った〈ベルト〉コインベルトやボンチョベルトためを好む〈体型〉細みの筋肉質で背が高い。174cm~182cm 脚も長い〈ブーツ〉先に鉄の入ったエンジニアブーツ〈ジーンズ〉リーバイスの501古着やデッドストックものが好き。洗濯は3ヵ月に1度〈ファッション〉タンクトップのほかに、Tシャツやオーバーオールも好き、女性の場合は「〈化粧〉フツーっぽいメイク〈髪型〉ロング、栗色のサラサラヘア〈メディスンバッグ〉もともとインディアンが薬入れにしていたもの。マディソンバッグではない! 「goro's」や上野アメ横センタービル「フェローズ」あたりで買う〈体型〉わりと小さめ153cm~158cm」と記している。また1991年10月9日号『SPA!』「群れたがる少年・少女の“規律と快感”」では、チームの掟として「1頭の命令には絶対服従 2ドラッグ禁止 3女はカワイくないとダメ」があり、そのファッションを「全体としてはワイルドなイメージ/まん中わけの長い髪/TATTOO (刺青) をいれるのがはやっている/シルバーのアクセサリー/Lee カリーバイス501のデッドストック¥15,000~50,000/エンジニアブーツ¥20,000~40,000 黒とか茶色 スニーカーだったら NIKE のデッドストック/バイソンの革ジャン¥60,000~90,000」と描いている。
- 7) たとえば1991年11月11日号『週刊大衆』「渋谷のチーマーからフツのOLまで: ただいま若者にタトゥーが蔓延中!」。またチームの起源について1991年11月12日号『AERA』「ファンキーズ伝説」は、「八四年夏、明大中野の中等部時代から目立っていた波長の合う高校二年のしゃれ者五人が、渋谷界隈を遊びだした。/それがチームの元祖、伝説のファンキーズの始まりだった。/半年後、黒地のウィンドブレーカーを作り、背中に「FANKYS」と白色で入れた。/ファッションは、一点豪華主義。ジーンズにワークブーツだが、三十万円のアルマーニの革ジャンに、三十万円のローレックス、と凝った。・ディスコのVIPルームでドラッグも一通りやった。大学生と偽って、マハラジャで三百人のパーティーを主催する。冬には、三百人のスキーツアーも取り仕切った。/が、ファンキーズが無理やりパー券を買わせたといい通報で麻布警察が動き、教頭は卒業と交換条件でウィンドブレーカーを彼らから奪った」と伝えている。
- 8) 1992年7月放送開始の『進め! 電波少年』は、その第1回目の放送において「渋谷のチーマーを更正させたい」

“-er” “-ie” の濫用（とその語のマスメディアによるフィーチャー）が、90年代中盤以降の「人名およびブランド名+er」類出の前提であった<sup>9)</sup>。

### 【3】「マイブーム」としての“-er”： 1990年代後半

そのチーマーたちのファッションであった「渋谷カジ」には、彼・彼女たちの御用達ショップである「バックドロップ」で洋服を買う人々を「バックドロッパー」、同じく「レッドウッド」のファンを「レッドウッダー」と呼ぶといったように、店名に“-er”を付す用法が存在した（松木, 1989）。だが、それはまだ限られた範囲で通用する言葉に過ぎず、あるカリスマ的なショップやブランド、さらには人名に“-er”をつけて、そのワナビーズ（wannabes）たちを表す語法は、1995年あたりから始まる「シャネラー（シャネルのファン）」や「アムラー（安室奈美恵のようなかっこうをした人々）」といった語（ないしそのファッション）の流行から一般化していく<sup>10)</sup>。

「シャネラー」という言葉自体は、関西地方の一部の女子大生の間で使われていた言葉だった。それを『JJ』は全国区にした。一九九四年八月号で

シャネル好きの大学生を「シャネラー」として紹介し、同時に、シャネラーを自認する人も募集したのだ。／翌月からは全国から続々と自称シャネラーが名乗りをあげ、誌面に登場するようになり、シャネラーがいるなら、グッチはグッチャー、フェンディはフェンディストと名づけられて、ブランド尽くしの女性たちが誌面が覆われるようになる」（三田村, 2004：72）

「1995年の暮れあたりから今年にかけて、急激に“アムラー”が続出している。…ほんのちょっと前までは…渋谷辺りを占領していたのは“コギャルシャネラー”だったのだ。…アムラーたちのファッションの基本とこだわり。まず、ヘア&メイク。／少し前まではサーファー系とダブられがちだった茶髪の胸までのロングヘアに、大胆なシャギーを入れて軽くし、頬を包むようなレイヤーカットのスタイル。…メイクは、流行の細い眉をポイントにして、アイラインをくっきりと出し、やはり流行のパール系のアイシャドーをベースに、黒人モデルっぽくエキゾチックに仕上げる。／ルージュは、ピンクのパール系から流行のベージュ系にポイントを置き、さらに唇の輪郭を濃くって塗るのが基本。／この時、輪郭をとった色よりワントーン落としたルージュを選ぶのが

---

という企画を立ち上げている（土屋, 2001）。このようにマスメディアによって揶揄される存在と化したチームは、「宇田川警備隊 渋谷、世田谷、目黒、港区あたりの中流以上の家庭に育った少年たちが約5年前に結成。中・高・大とエスカレーター式の学校に通うエリートも多い」（1991年10月9日号『SPA!』）といったような、本来の「知る人ぞ知る」稀少性を失い、1993年2月12日号『週刊ポスト』「松村邦洋（25）「チーマー」の去った渋谷に座り オレの天下だァ!バウバウ!!」においては「一説にはどうやら渋谷を去り、それぞれ地元に戻った」とされ、1996年1月24日号『SPA!』「'90年代ニッポン：あの【大騒動】は何だったのか!？」では、「東京近郊からの出張チーマーなどチームの数が増えるのにつれ、ケンカ沙汰が増加。暴力行為で警察から解散するように言われたチームもあり、チームは急速に衰退した」と回顧されている。また、1996年10月24日号『週刊新潮』「「チーマー」来たりて渋谷化する「池袋」には、「渋谷系なる言葉が流行ったが、次のトレンドはブクロ系?」とある。

- 9) 1980年代末から90年代にかけては、他にも“-an”を付した「ジベタリアン（地べたに座り込む若者たち）」——95年の言葉（亀井, 2000）。なお「オバタリアン」は89年の流行語大賞（自由国民社）の金賞——や、女性に奉仕する「ミツグ君」から派生して、運転手代わりの「アッシー（君）」や食事をおごるだけの「メッシー（君）」といった語も流行した（その現在形は、パソコンの世話をしてくれる「テッキー君」（亀井, 2003））。またマーケティング出自の命名法では、東京白金台あたりに住む裕福な専業主婦などを、ファッション誌が「シロガネーゼ」としてそのライフスタイルを紹介し（亀井, 2000）、最近では年収1千万円を超えるキャリアウーマンを「ミリオネーゼ」と呼ぶように、さまざまなヴァリエーションが存在する（三浦, 2005）。
- 10) アムラー以前にも、マッキントッシュの愛好家「マッカー」（青木光恵のマンガ『パソミツ』の1994年8月1日付のページ）や、オウム真理教に「萌える」女性たち「オウマー」（1995年9月18日号『AERA』「不可解教団の内側：オウムは今も変わらない」）などの語は存在したが、一般的に使用されてはいない。またアムラーから派生して、「アララー（アムラーのなりそこない）」や「マネラー」といった語も存在した（米川, 1997）。なお「アムラー」は96年の、「マイブーム」は97年の流行語大賞のトップテンに入賞している。

ポイント。／そしてファッション。…ボディラインがくっきりと出るピッチリとしたトップで女らしさを醸し、基本はヘソ出しルック。／パンツが見えてもお構いなしの超ミニスカートか、ヒップがはみ出してもOKのショートパンツが定番になる。／ピアスは両耳に、そして1つや2つでなく何個も飾るが、ただジャラジャラと吊すタイプはタブー。／何個ものピアスはすべてピタッとはまるタイプが基本であり、それもすべてシルバーのデザインが異なるもの。／リングもシルバーが基本だが、ややごっつめのタイプがポイント。／靴は常に厚底でやはりごっつめのブーツ。／ヒールの場合も、ローヒールではなく、厚底でごっつめなのが基本」(アムラー徹底研究会, 1996:13-9)

このアムラーという語も、もともとは若者たちの間で発生したものであろうが、1996年6月1日号『プチseven』の特集「アムラー vs ハマダー 誌上ブレイク合戦」——「プチに登場して、すっかり流行語にもなったアムラー＝安室奈美恵風ブラック系ファッション。アメカジ+古着ストリート系のダウタウン浜ちゃんファッションがお手本のハマダー。いまティーンに人気のファッションといたらもうこのどっちかしかないってカンジだよね」——といったように、シャネラー同様、すぐさまファッション雑誌がピックアップすることで普及していき、さらには雑誌メディア主導のもと、類語が創出されていったのである(難波, 2000)<sup>11)</sup>。

以降、96年に「ナオラー(飯島直子)」「カハラー(華原朋美)」「トモラー(山口智子)」「プラダー(プラダ)」「パファイラー(パフィー)」「シノラー(篠原ともえ)」などが登場している(1997年8月20日号『SPA!』「イマドキの日本人大図鑑新種・珍種」)。そして、その後も「フェンダー(フェンディ)」「(米川, 1996)、「ヴィトラー(ヴィトン)」「ネラー(シャネラーの省略形)」

「ピンキー(ピンクハウス)」「(米川, 1997)<sup>12)</sup>、「メタラー(ヘヴェイ・メタルのファン)」「(1997年6月号『BART』「アニメタルのライブにはオタクとメタラーがひしめき合う)」、「オーマー(オウム真理教から。不審な人の意)」「(米川, 1998)、「イザマー(ヴィジュアル系ユニット SHAZNA のヴォーカル IZAM)」「(1998年6月16日発行『別冊宝島391:超コギャル読本』)、「エンジェラー(卓也エンジェルの服を好む人々)」「(1998年6月号『アクロス』「90年代の竹の子ともいえるエンジェラー)」、「ヒカラー(裏原系キー・パーソンの一人岩永ヒカル)」「(1998年8月号『relax』「チン人類探訪)」、「ムジラー(無印良品)」「(1998年8月1日号『女性自身』「不況に強いおシャレさん!?:「ムジラー」が行く)、「ルミナー(佐藤ルミナ)」「(1999年8月11日号『SPA!』「新世代カリスマ格闘家がストリート系ファッションに包んだ「魂」)、「エツラー(市原悦子)」「(小林, 2000)、「コムラー(小室哲哉)」「(コギャル語ワードバンク <http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/7218/kogalword.html>)、「ヴィトナー(ヴィトン)」「セメラ(安倍晴明)」「(イミダス編集部, 2003)など「ブランド名・人名+er」の族生は続き、また「キティラー(ハロー・キティのキャラクターが好きの人々)」「(柳川・たまや JAPAN, 1998)、「タビラー(イギリス BBC 製作の番組『テレタビーズ』のファン)」「(1998年10月27日号『週刊プレイボーイ』「キミも“タビラー”になるでちゅ!)、「クラバー(クラブ好き)」「(稲垣, 1999)、「アロマー(アロマテラピー好き)」「ネバラー(ねばねばした食材を好む)」「ヘンパー(生活全般に大麻(ヘンプ)を取り入れることを信条とする人)」「マクラー(自分にあった枕選びにこだわる人)」「(亀井, 2000)、「マヨラー(何にでもマヨネーズをかける人)」「(イミダス編集部, 2003)といった言葉が、90年代後半には存在していた<sup>13)</sup>。

11) 1997年6月20日発行『(祥伝社ムック) BOON EXTRA:ザ・カッコマン』によれば、街の「カッコマン」に支持されるファッション・リーダーは、「1位前園真聖(52票)、2位藤原ヒロシ(50票)、3位浜田雅功(25票)」。なおこの本では、浜田フォロアーは「ハマラー」と記されている。

12) ピンクハウスのファンには「ピンハー」の異称もある(中島, 2003)。

13) 1998年に歌手デビューした浜崎あゆみのファンが、「アユラー」と呼ばれる一方で、アユの友釣り愛好家も「アユラー」とされている(2000年5月28日付『読売新聞(大阪朝刊京都市内版)』「この夏、君も“アユラー”に:漁連が30日に「友釣り講習会」開く)。その他、自傷癖のある「ジショラー」(1999年7月号『BURST』「僕

96年には「マイブーム」が流行語となり、1997年6月25日号『popeye』では「it's my boom: カリスマたちのマイブーム大集合」といった特集が組まれるなど、流行現象が限りなく細分化・局地的・アドホック化していく中で、“-er”“-ie”による造語は、新たなかつ持続的なサブカルチャラル・アイデンティティーズの誕生を表現するものでも、さらには若者間の集団語としてその連帯を確認するものでもなく、その時々「○○さんのセンスを崇拜し、自らのファッションや生活に取り入れている人」や「○○にハマっている、ないしは○○な気分の私」を言い表すための用語として無限増殖を続け、かつ速やかに廃れていったのである。潜在し、伏流し続けた「ビックリハウス」意識（近藤，2005）やかたちを変えつつも持続する「ヤンキー」（嶽本，2002・2005）に比

べ<sup>14</sup>）、90年代に生まれた“-er”語は、その多くが瞬時に姿を消していった。

#### 参考文献

- アムラー徹底研究会 1996『コギャルの星安室奈美恵の研究』飯倉書房  
 青木光恵 1995『ばそみつ』アスキー  
 朝日新聞社編 1993『朝日ジャーナルの時代』朝日新聞社  
 萩原朔美監修 1993『ビックリハウス驚愕大全』NTT出版  
 本田由紀 2005『若者と仕事』東京大学出版会  
 飯野公一ほか 2003『新世代の言語学』くろしお出版  
 今井俊博 1975『生活ファッション考』青友書房  
 イミダス編集部編 2003『新語死語流行語』集英社新書  
 稲垣吉彦 1999『平成・新語×流行語小事典』講談社現代新書  
 岩松研吉郎 2001『日本語の化学』ぶんか社  
 2005『日本語の化学変化』日本文芸社  
 岩田龍子ほか 1987『ジャッピー：きみは大人になれる

は自称「ジショラー」]、椎名へきるファンの「ヘキラー」（岡田，2003）、ヴィジュアル系バンド・ピエロのファン「ピエラー」（中西，2004）、抗鬱剤に依存する「リタラー」（今，2004）、メンタル・ヘルスのケアが必要な「メンヘラー」（宮台，2005）、2005年12月1日創刊の『GISELe』（主婦の友社）がターゲットとする「アラサー（30才前後、アラウンド・サーティの女性の意）」など。IT関連では、「（2ちゃん）ねらー」「VIPPER（2ちゃんねるの「ニュー速VIP」板の住人）」「プロガー（ブログを書く人）」などが今日広く知られている。また岩松研吉郎は、「ラー一族」と称して、以下のようなコトバを紹介している（岩松，2001・2005）。ウノラー（神田うののようによくしゃべる人）、ダフラー（ダフ屋のような派手なファッションをしている人）、タオラー（首にタオルを巻くストリートファッション）、マドラー（窓際族）、ジミラー（サッカー日本代表チームの岡田監督のような見た目が地味な人）、ミノラー（みのもんたのように押しの強い人）、ガブラー（有森裕子の夫のような人）、パクラー（「バクル（盗む）」人）、ハバラー（アキバ系）、ピニラー（ピニ本好き）、パレズラー（カツラであることがばれている人）、フマキラー（キャバクラ嬢用語で害虫のような客）、シゲラー（長嶋茂雄のように何でもほしがる人）、ウチラー（「ウチラウチラ」を連発する女子高生）。アムラーなどの語が本来持っていた、ファンダムやワナabeez——特に若者たちの間での——といったニュアンスは消失している。その傾向は、カツラー、ケチャッパー、コモラー（ひきこもり）、ユニクラー（ユニクロ好き）、シュノラー（収納上手の主婦）、ペランダー（ペランダでのガーデニング）など、今日も続いている（亀井，2003）。

- 14) 当初あった「チーマー／ヤンキー」の区別に関して、「伝説のチーマー レディーズりさ（18才）」は、93年秋の取材時に「——なんか規則とか、やめるときボコるとか、ヤンキーみたいだね。／「規則とかは似てますよね。ウチの後輩にも元ヤン（キー）いっぱいいるし、ヤンキーの気持ちは、わからないでもない（笑）。……でもやっぱ違いますよ。ヤンキーはケンカに命かけちゃったりするし、遊ばないじゃないですか。チームはサーフィンとかクラブ、車……なんでも遊ぶし。ケンカなんか命かけたりしませんよ。楽しむことが第一だから」と述べている（1994年6月20日号『GON!』）。大沢在昌は小説の登場人物に「暴走族にはリーダーがいて、そのリーダーには親衛隊やガードがつく。しかしチームはちがう。盛り場で集合するときのみ、漠然とした形での指揮者が決定するだけだ。盛り場を一步でれば、チームのメンバーは、ばらばらな居住地に帰っていく。暴走族が、同一地域を縄張りとし、居住地を支配圏として、集団名にすらこだわったのとは、まったくちがうのだ。／チームのリーダーは、盛り場にあってこそリーダーだが、自宅に帰れば、ありきたりの若者にすぎない。家族ですら、我が子が盛り場でチームを率いているとは知らないのだ」と語らせている（大沢，2000：92-3）。また、デヴュー前の浜崎あゆみの写真を掲載した2000年6月21日号『FOCUS』には、「コギャルの教祖・浜崎あゆみ 中学時代のワー、ヤンキーじゃん!?:せめてチーマー系だったら…」とある。しかし、チーマーがセンター街を去り、それぞれの地元で拠点を移す——その一部は「ギャング」と自称、ないし他称されるようになる——につれ、ヤンキーとチーマーの区別は曖昧になっていく。『日本一の田舎はどこだ』と題された本には、「田舎度自慢」の一環として、「チーマーみたいなやつがいるけど紙一重なので、ここはヤンキー=チーマーというハンパなところ。ヤンママも多い。バリバリミキハウス着て茶髪なママがかたまってる。（神奈川）」とある（清水，1996：49）。2005年にテレビドラマ化もされたマンガ『ホーリーランド』（『ヤングアニマル』誌上に2000年より連載開始）では、街にたまる不良全般が、「ヤンキー」と称されている。

- か』婦人画報社  
 陣内正敬 2006「方言の年齢差：若者を中心に」『日本語学』25-1  
 亀井肇 2000『平成新語・流行語辞典：外辞苑』平凡社  
 2003『若者言葉辞典』NHK出版  
 加藤迪男 2001『20世紀のことばの年表』東京堂出版  
 川崎洋 1985『最新版ギャル語分け知り情報館』講談社  
 木村傳伝衛ほか 2005『新語・流行語大全』自由国民社  
 小林信彦 2000『現代く死語〉ノートⅡ』岩波新書  
 今一生 2004『大人の知らない子どもたち』学事出版  
 近藤正高 2005「みーんな投稿欄から大きくなった♪：サブカルチャー雑誌・投稿欄盛衰記」『ユリイカ』37-8  
 KORN 監修 2002『ディスコ伝説70's』銀河出版  
 小杉礼子編 2005『フリーターとニート』勁草書房  
 松木直也 1989「渋カジのできるまで」1989年11月号『東京人』26  
 道下裕史 2001『エグゼクティブフリーター』ワニブックス  
 三田村路子 2004『ブランドビジネス』平凡社新書  
 三浦展 2005『下流社会：新たな階層集団の出現』光文社新書  
 みうらじゅん 1997『マイブームの魂』毎日新聞社  
 宮台真司編 2005『サブカル真論』ウェイツ  
 宮西直子編 1991『時流語』新峰社  
 水原明人 1996『「死語」コレクション』講談社現代新書  
 中島沙帆子 2003『電脳やおい少女②』竹書房  
 中西新太郎 2004『若者たちに何が起きているのか』花伝社  
 難波功士 2000「ファッション雑誌にみる“カリスマ”」『関西学院大学社会学部紀要』87  
 2005a「戦後ユース・サブカルチャーズについて(3)：暴走族とクリスタル族」『関西学院大学社会学部紀要』98  
 2005b「「族」から「系」へ」『関西学院大学社会学部紀要』98  
 2005c「渋カジ考」『関西学院大学社会学部紀要』99  
 20世紀死語辞典編集委員会編 2000『20世紀死語辞典』太陽出版  
 岡田斗司夫 2003『オタクの迷い道』文春文庫  
 大迫秀樹 2004『消えゆく日本の俗語\*流行語辞典』東邦出版  
 大沢在昌 2000『心では重すぎる』文芸春秋  
 大山昌彦 2003「若者サブカルチャーとポピュラー音楽」東谷護編『ポピュラー音楽のまなざし』勁草書房  
 佐藤洋介・平塚眞樹編 2005『ニート・フリーターと学力』明石書店  
 清水ちなみ 1996『日本一の田舎はどこだ』幻冬舎  
 土屋敏男 2001『電波少年最終回』日本テレビ放送網  
 嶽本野ばら 2002『下妻物語：ヤンキーちゃんとロリータちゃん』小学館  
 2005『下妻物語②：ヤンキーちゃんとロリータちゃんと殺人事件』小学館  
 柳川圭子・たまやJAPAN 1998『女子高生のし・く・み：TOKYOの彼女たち、そのココロとカラダ』KKベストセラーズ  
 米川明彦 1989『新語と流行語』南雲堂  
 1996『現代若者ことば考』丸善ライブラリー  
 1997『若者ことば辞典』東京堂出版  
 1998『若者語を科学する』明治書院  
 2002『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』三省堂  
 湯山玲子 2005『クラブカルチャー!』毎日新聞社



## The History of Neology Using the Suffix ‘-er’ in Japanese: In terms of sub-cultural identities of youths

### ABSTRACT

In the 1970s, some young people began to take pleasure in creating Japanese words coined with the suffix ‘-er’. For example, there were readers and contributors of “*Bikkuri-house*” magazine, who were called “(*Bikkuri-*) *houser*”, first by editors, and then even by themselves. In this era, coinages with ‘-er’ were alternatives for labeling the youth by adults or the mass media. In the 1980s, such puns and word-plays were diffused among young people. In the middle of the 1990s, the new words, ‘*Chanel*’ and ‘*Amuro*’, were used by young people and immediately became vogue-words through the mass media. The former meant fans of ‘Chanel’ brand and the latter meant wannabes of ‘Amuro Namie’, who was the singer and dancer most popular with teenage girls at that time. Afterwards, many new coinages have been made by this word formation, ‘brand name +er’ or ‘celebrity’s name +er’. In the end, the genealogy of Japanese coinages with the suffix ‘-er’ resulted in the emergence of fandom following certain brands or modes advocated by celebrities through the mass media.

**Key Words:** neology, fandom, youth subcultures